

萌芽は北辺の凍土にありて

——— 社会福祉法人至愛協会とゆりのき保育園の来歴 ———

社会福祉法人 至愛協会 前理事長 中 嶋 博

社会福祉法人至愛協会の歴史を、今日からきのう、きのうからその先へと、ひもを手繰るよ
うにどこまでも手繰り寄せていくと、やがて北海道の北辺で小さな教会を守り、地域の人々と
徹底的に歩み続けた若き一人の牧師の「死」にたどりつく。

いわばそこが、至愛協会来歴の最初の切り口といえよう。今から43年も前のことである。

その牧師とは、日本キリスト教団^{おけと}置戸教会、野口重光がその人である。彼は、1923年（大
正12年）に北海道の置戸町に生まれ、少年期をその町で過ごしたのち、高校卒業と同時に志
願兵として第二次大戦に従軍。が、ほどなく帯広航空隊の通信兵として終戦を迎える。

支柱を失った日本人の多くがそうであったように、彼もまた、生きていく目標や意味を見失
い、焦燥の日々をつづける。

いよいよ追い詰められた彼は軍刀を携えて死に場所を探し始めるのだが、そんな折、路傍で
伝道する一人のキリスト者に出会う。

伝道者の言葉は、す枯れた彼の心に深く染み込んだ。そして、長い間、求めつづけても決し
て得られなかった「真実」^{まみ}に見えることができた彼は、その後の生き方を大きく転換していく。

1948年4月、彼の信仰は時満ち、牧師として仕えていくことを決意。当時は東京・日野
市にあった農村伝道神学校に入学した。

のちに、ゆりのき保育園園長となる野口も、そのころ生きる真実を求めて同じ神学校のチャ
ペルに通っていた。

導かれて時がすぎ、彼女もまた洗礼を受け、やがて神学校の室野牧師から、学生であった重
光に^{めあ}妻合わされた。

二人は人生の同伴者としての影が色濃く滲んでいるのを感じ、1951年3月、重光の卒業
と同時に結婚。郷里伝道に召命を感じていた重光とともに、置戸の地に立った。

帰郷した重光は、直ちに教会堂と保育園の建設に取り組んだ。長い間、金策に明け暮れ、汗
にまみれて没頭した末、数年後の夏、木の香も新しい教会堂と保育園が完成した。鐘楼のある
尖塔には、白い十字架が高々と掲げられ、「ここに教会あり」と、藍色をおびた道北の空に美
しく輝いた。

ここから、重光の仕事が本格的にはじまった。彼の働きは、狭い意味での伝道にはとどまら
ず、終始、地域の人々に徹頭徹尾「仕える」姿勢をとった。

例えば、町の周囲にはいくつもの開拓地があったが、彼はそこをよく尋ねた。

当時の開拓地といえ、貧しさの限りを尽くした入植者たちが暮らしていたが、そこをいつ

も訪れては、一緒に農作業に汗を流し、苦楽をともにすることを通して彼らの力となった。また、栄養不足で身体を衰弱させてしまった人たちには、食料を差し入れることも忘れなかった。

彼の働きは、それだけにとどまらなかった。広大な地域を歩き回り、問題や不合理なところを見つけると、人々とともにその改善に力を尽くした。

彼のこうした仕事のやり方は、単に「伝道的手段」といった冷たい発想からでたものでは決してなかった。

そんな姿を、はじめは冷めた眼線で見つづけていた郷里の人々であったが、次第に牧師としての信頼と評価を高めていった。加えて、「町民の悩みを真摯に聞いてくれる人」という風評が広がり、民生委員をはじめPTA会長など、十あまりの公職にも次々に推挙され、ここでも力を尽くした。

かくして15年……。

しゃにむに地域のために仕えていた彼だったが、突如、身体の変調を訴えはじめた。

それでもはじめは、いつもの仕事を気丈にこなしていたが、病状は自覚症状のないまま悪化の一途をたどり、その年の秋には、嫌がる本人を説得して札幌の北海道大学病院に検査入院をさせた。

ところが、病状は周囲の予想をはるかに超えて重く、結果は慢性腎炎の末期で、家族にはもはや不治であり、あと数ヶ月の命であることが伝えられた。

入院当初は、訪れる人々に笑顔で応対していた彼だったが、次第に病状は衰微にむかった。

このころ、病室にはたくさんの地域の同労の牧師らが絶えず訪れ、いつも祈りつつ見守ってくれていた。

重光が入院して1ヶ月半が過ぎるころになると、病状はさらに篤さを深め、ついにいまわのときが訪れた。遥か遠くに消え去ろうとする意識の果てから、彼は最後に、

「私は牧師……」

と傲然と言い放って息を引き取った。入院して50日目、窓外では吹雪が荒れ狂う1967年（昭和42年）1月8日の未明のことであった。

翌日、置戸町の人々は、大雪山麓を越える遠い雪道を夜通し車を走らせ、遺体を迎えにきてくれた。そして、熱き信仰と情熱を除けば無一物に等しい若き牧者の死を惜しむ多くの人々の好意によって、数日後、盛大な「置戸町葬」がとり行われた。億兆の針先をまいたようなダイヤモンドダストが、折からの冷気に美しく舞う酷寒の日であった。

日ごろ、健康であることを自負し、病の床に伏したこともない人の急逝は、家族にとっても、周囲にとっても、晴天の霹靂ともいえる哀しい出来事であった。

しかし生前、教会の仕事とともに、地域のために自らを捧げつくした重光の生き方は、その早逝によって一層人々の心を動かし、次第にその目線が4人の幼い遺児へと注がれていった。

そうした人々の心は、間もなく「遺児奨学金募金」という運動に発展していき、また、その

ことが教団の雑誌「信徒の友」にも大きく取り上げられたこともあって、その輪はやがて全国へと広がっていった。

そして数ヵ月後、それまで牧師の家では出会ったこともない大金となって家族へと手渡された。

しかし、この宝を押し頂いた野口は、人々の厚志に感謝しながらも、どうしても個人的に使い果たす気にはなれず、広く人々のために用いる方法はないだろうかと考えていた。

その年の夏、私は北海道旅行をかねて再び野口家を訪れた。そして、その折に、寄せられた厚志のより良い用い方を相談された。

私たちは数日間、話し合いを重ね、その末に、亡き重光の生き方を^{けんしょう}顕彰するためにも、「東京で保育園をやろう」という結論に至った。彼が成し遂げられなかった^{こころざし}志をわずかでも継承できる可能性があると思えたからである。

だが、こうして保育園をやろうと潔く決めはしたものの、はじめからその成算があったわけではなかった。だからまず、東京に帰ったわたしは、当時住んでいた日野市周辺の土地探しからはじめた。

が、ベットタウンとして急激な開発が進んでいたために、私たちが買えそうなところは保育園の必要はなく、逆にその必要性が高いところは、まったく手が出なかった。このため、土地を借りる方法も併せて進めていたのだが、これもまたうまくいかなかった。

なにせ若干24歳の若僧が、現金は奨学金の数百万円しかないのに、5千万円（今日の金額では4億5千万円ほどである）にも及ぶ計画を携えて地主さんと交渉してみたところで、信用など得られるはずもなかったからである。

いささかのきっかけも、糸口の穂先すら見出せないまま、空しく1年半あまりが過ぎていき、計画は、ほぼ断念しざるを得ないところまで追い込まれていった。

ところが、幸運は意外なところにその後ろ姿を遠くに見せた。

このころ、私はいつも日野市の担当係長に世話になっていたのだが、あるとき彼のところを訪ねると、私の顔を見るなり、「たった今、造成中の多摩ニューウタウンで設置者を公募しているという話があったよ！」というのである。

「すぐに多摩町に行ってみなさい」という言葉に押されて、その足で役場に向かった。

町の課長から話を聞くと、土地は住宅公団から貸与されること、すでに6つの団体から希望があり、2週間後には計画書類を提出すること、その結果によっては町の理事者と面接してもらうようになること、などが次々と示された。

しかし、である。

正直、私はたじろいだ。わずか2週間で社会福祉法人と保育園の設立や運営などの詳細な計画を立てなければならないのだ。それに、威名を馳せた6つもの法人などがすでに手を挙げている。こちらはお金も地位も実績も何もないのだ。とても勝算があるとは思えなかったからだ。

だが、幸いそんなことをくねくねと考えている時間がなかった。「ままよ！」と開き直ってす

ぐに作業に取りかかった。

毎日が飛ぶように流れ、あてにしていた明日はすぐに昨日になった。が、徹夜に近い毎日を重ねたすえ、期日の朝、いま思えば稚拙な事業計画をなんとかまとめ上げ、提出をすることができたのだった。

その日から10日がたったころだった。町の課長から電話があった。「書類選考は通り、3日後に町の理事者と面接をしてもらおうことになったので来庁するように」とのことであった。

約束の日、私は張りつめた思いで役場に向かった。着くとすぐに広い応接室に通され、そこには町長を真ん中に、助役や関係部課長十数人が居並ぶ、まるで被告席のようなところに座らされた。

値ぶみをされるような視線を一斉に受けながら、次々と質問が浴びせられたが、私は精一杯の知ったかぶりで応戦した。悪戦苦闘のすえ、面接はともあれ1時間ほどで終わり、結果は2週間後に出るとのことであった。

期待をするでもなく、さりとしてまったく忘れるでもなく、どこかにか細い願いを一本のクモ糸のようにつなげて2週間を過ごすと、予告どおり、なぜか電報で結果が自宅に届いた。

文面はわかりきっていたようなものだったので、ごく平静に開封をした。ところが、である。何とそこには「キデンヲ、ホイクショセツチシャトシテ、ミトムル」と打たれていたのだ。「ミトメズ」なのではないかと、何度も眼を凝らしたが間違いではなかった。

意外な結果に頭が混乱したが、やがて奔流のような悦びが深いところから湧きあがり、次いで天馬で空を馳せるような快気を覚えたものだった。

忘れもしない、金色に笹ぶちどられた雲が、西空に浮かぶ5月はじめのたそがれ方であった。

後日談になるが、この選考には富沢政鑑町長の意向が強く働いていたという話を聞いていたことや、私自身がどこか合点がいかないところがあったので、ある集会で町長と同席した折に、「なぜ私だったのか」を訊ねたことがあった。

と、老公のような町長の答えはすこぶる簡単だった。

「なーに、ニュータウンは新しい街だろ。新しい街には、若い人が必要なんだよ」と、ただそれだけだった。およそ行政らしくない危険のともなう選択をした老町長の、その底知れぬふところの大きさに痛み入ったものだった。

こうして、多摩ニュータウンの第1号の保育園設置者に選ばれた私たちは、直ちにその作業に取りかかった。もっとも遺族となった野口一家は、このころはまだ北海道にあったために、わたし独りで奮闘するしかなかった。

建設途上の悩みは、枚挙にいとまがないのだが、もっとも苦闘したのが、やはりお金だった。

野口一家に寄せられた奨学金は、それだけを見れば多額だったが、建築費のなかでは、はかなかった。

私も親の残してくれた土地を処分したのだが、それでもまだ多額の資金が足りず、福祉関係機関から融資を受けなければならなかった。

だが、ここに大きな問題が立ちはだかった。融資をしてもらうには、実に借り入れるお金の1・5倍もの価値がある担保物件を用意しなければならなかったのだ。その額は、今日の金額に換算すれば2億7千万円ほどになるろう。

親戚、知人、教会関係者などを頼り、頭を下げて歩いたが、猫がネズミをもてあそぶように適当にあしらわれた。今思えば無理もない。24歳の若僧の、こんな話を信用してくれというほうが所詮無理なのである。

計画はここでまた、超えがたい高い壁に行き当たってしまい、頓挫の危機に瀕していくなかで、私は心身ともに憔悴しきっていた。

ところが、である。ここでもまた、実に不思議なことが起こった。

私はある日、たまたま農村伝道神学校を訪ねたことがあった。神学校は、このころ町田市に移っていたのだが、そこで偶然、第1期生の野口重光を教えた、あの室野牧師とキャンパスの中でばったりと出会ったのだ。

あの温雅な面ざしの先生にまみえたとき、私はついつい保育園の計画が頓挫しそうなことを、乱れた気持ちとともに吐露してしまったのである。

すると先生は、しばらく黙考していたのだが、突如「ほかならぬ農伝神学校の第1期生のためだ。私がこの神学校の土地を何とかしよう！」と傲然というのだ。

にわかに信じがたい思いだったが、実際、先生はすぐに臨時の理事会を開き、実に1千余坪にも及ぶ土地の担保提供に寄与して下さったのである。

それを実行に移そうとしたときには、東京都の担当官が「学校法人の土地を私人に担保提供するなどもってのほか！」と、猛然と反対したのだが、その前に敢然と立ちはだかってくれたのもまた、室野先生であった。

私たちは、こうして限りなく高い障壁を乗り越えることができたのだが、もしこのとき、先生との出会いがなかったとしたら、おそらくは保育園は誕生していなかったであろう。

想えば実に不可思議な縁（よすが）であった。

保育園の建設途上で、私たちが苦悩したもう一つの大きな闘いは、「キリスト教主義保育」をめぐる問題であった。

そもそも保育園をはじめようとしたのは、亡き野口重光の生き方を顕彰しようというところにあつたので、キリスト教主義の保育をしていくことは、私たちの当然の祈りであり、願いであった。

ところが、多摩町の担当課長が「保育園は半ば公的な場所であり、そこで宗教保育を行うことは認められない」というのだ。何度も話し合いをしたのだが、「これは町としての考えなので」と、まったく取り合ってもらえなかった。

それが、間もなく開園するというところまでいっても事は進展せず、もはや私たちは深い愁いと屈辱感のなかで、あたわぬこととして諦めなければならなかった。

だが、ここでもまた、まるで奇跡のような、何とも不思議で破格なことが起こった。

開園が数日後に迫った3月末のことである。

私たちはお世話になった方々を迎えて竣工開園式の礼拝と祝会を行ったのだが、そこに予告なしで突然町長が列席をしたのだ。そして、私たちの経過報告や中嶋正昭牧師の説教などに心を打たれたと前置きをして、なんと「新しい街づくりのパイオニアとして、キリスト教の精神を大切にしたい保育を、どうぞ大いに進めていってください」と祝辞をのべたのである。

それも、あの課長の前で、である。驚きとともに、心の底から待ち望んでいたその一言半句が心に沁みだした。重く、限りなく尊く……。

しかも、あとで聞けば「今日は学校の開校式や卒業式が多くて出席する予定はなかったんだが、妙に出てみたくなったんだよ」というのである。おそらくは、頼りない若造がどうなっているのか気になったのであろう。

長く心に立ちこめていた暗雲は一瞬にして晴れ、私たちは大いに喜んだ。

野口重光が北辺に散り、凍土に落ちた一粒の種が、遙か永山の地で胎動し始めた瞬間でもあった。

このとき、すでに重光昇天後、4年あまりの歳月が流れていた。キリスト教の悠久の時間からすれば、まばたききほどの時であろうが、進んでは戻り、泣いては笑う道のりを歩んできた私たちにとっては、果てしなく長く、遠い、遙かな歳月であった。

かくして社会福祉法人至愛協会とゆりのき保育園は、大きな志を柱に据え、いよいよ光に向かって晴ればれと第一歩をしるしていくことになったのだった。

時に、1976年4月のことであった。